



試し読み

陽光／果實の系統／かさゝぎ

知古文庫

当ファイルを許可無く印刷またはインターネットを介して
第三者へ配布することを禁じます。

陽荒

果實の系統

かさまぎ

いかるが つみき

陽光 ● 果實

の系統 ● か

さゝぎ ●

いかるが つみき

陽
荒

電車の中。隣の吊り革に伸びた女の腕が白かった。やわらかに垂れた袖はゆつたりと肌を蔽い隠しているようで、いや、むしろ伸ばしたときにのぞく白さを際立たせているようで、どちらにしても罪深さを覚える。糖のような薫り。巷、香水はたくさんある。石鹼も。制汗スプレーだつて薫る。だけど、少し湿つたような汗の臭いとは、どことなく異なる。人工的な気がして嘘臭い。喩えば茎を切つて、食紅を混ぜた水に浸けておくと、葉脈からうつすら色づき、花びらが染まる。だけど、どこか嘘臭い。しらじらしい色彩。

僕が女性だつたら——たぶん、いま、あたりまえのように考えていることも滃かわつて見えるに違いない。前の座席で、手鏡に顔を寄せ化粧している女が居るけれど、構わない、それで綺麗になれるのなら。当然のことだろうと思う。吊り革の女は、やや首を斜めに傾げ、下目に、なにかの書類を追っていた。失礼だ、戒めながらも白さに目が奪われる。女性が化粧をするのは当然だ。産まれ持った美しさと魅力を、さらに磨きたくなるのは当然だし、それを捉えよ

うとする男の、かたときも容赦ない視線に晒され続けなければならぬのだから。ある意味、防御の役割もあるのかもしれない。勿論、吊り革の女の頬には化粧の質感が。唇には紅の質感がする。変わって、腕は、露わになったこの腕は、なにも塗りこめられていない、だけど（見える限り）どの部位よりも白い、無防備に思えた。あの跡はなんの跡だろう。バッグの紐か、袖口の跡か、白い肌を線状にはしる、薄赤い跡。内側から滲んでくるような色、薰りもそこから漂ってくるように想える。どことなく、口の中に蜜のような味を覚える。

爪のことを考える。まずは形から。整った形は晴れ晴れしい。不格好なものも素朴さがある。付け爪などしてしまおうと、なんとも考えられないので惜しい。だけど、飾るのは楽しいだろうな。また、女性に^{かわ}滲^{しみ}ってみるならば、きつと、服の色を選ぶ以上に、爪の色をどうするかで悩むだろう。指先に赤が輝いていたらどうだろうか。青は有機的なものにはあまりない色だ、それを施すのはどうか。黒は。艶やかな黒い真珠のように光つたら、高貴だ。けれど、どこか攻撃的な——もう1度^{ひるがえ}翻^{ひるがえ}つて、それを男はどう思うのか、と考える。いつもはしない赤い色の爪を、ふ、と^{のぞ}覗^{のぞ}かせて、相手はどう思うのか。お洒落だと感じるだろうか。挑発的だと感じるだろうか。なにも感じないということも考えられる。はたまた、気づかれずに、やきもきすることも。では、青は——黒は——、なにもつけず磨くだけにしてみたらどうだろうか。結局、好みだろうか。

明日の会議用に、と渡された。プリントの内容よりも、受けとつたときに見た手の白さのほう^が余程気になる。自分と比べ、角張りがなく、弛^{たゆ}んでいる。

アレは温かいのだろうか。冷たいのだろうか。餅のようだと喩えが浮かんで、あるいは、小麦の粘つた、味の加えていないパンの生地のような、噛めば交じつて味が増す感覚——まさか可食性があるだろうか、唾液が味を想像する。そういうえば、なにも飾っていない爪から透けている、その下の皮膚は、本当の素肌であるような気がする。外皮でもあり、内臓の一部であるかのような曖昧な、包み隠す堅い殻を剥いたらどこよりも敏感であろう模糊たる澱粉質の色。護られていたがため、気にも留めず、迂闊に素肌を晒らけだしているさまは、無防備に思えて、なんだか厭らしい感じもするのだ。

充たした水玉風船を思いだす。握ればやわらかに膨らむ。意地悪く傷つければすぐ破ける。やさしく放つて、成程、覚束なげに弾む。

透視できない人間の眼からすると、甚だ疑わしい。はなはアレは中身がちゃんと詰まっているのだろうか。皮膚の下には筋肉があつて、骨がある。それは自分の身体を触ってみればよく判る。息を吸えば腹筋が、足を動かせば大腿筋が動く。

注視すれば、服の上から見て判る。振り向いたときにうつすら鎖骨が筋張る。腕を上げれば、にのうでが揺れる。ヒールを履いたふくらはぎの腓腹筋はやや円く膨らみ、歩くと大腿筋が緩やかに波うつている。だが、アレは本当に中身が詰まっているのだろうか。肉の動きはあまりにもしなやかで、想定するやわらかさは、感触のないもののように思える。

だいたい、生活は反復に落ちついてしまふ。退屈だ、とは云いながらも、どこかそのサイクルに安心を求めているような気もする。事実、日々考えることは繁雑すぎて、簡略できるなら——思考せずとも、パターン化してこなししてし

まえる雑務などは、単純に片づけてしまえば善いんだ。朝、起きて——朝食をとり——着替えて——家を出て——電車に乗る。慣れきってしまつたサイクル。いつもはなににも考えずにやっている。玄関を出る時間も、歩道橋を渡る時間も、狂わずおなじ。駅へ向かう道順も、抜ける改札が一番端なことも、電車を待つフォームの位置までもがいつも変わらないことに気づく。更には、並んでいる人の顔がいつもおなじなこと。ふいに我に返ると、ネクタイを締めることにもまごついてしまつたりする。考えれば、むしろ混乱する。ふだん、あまりに脳を使っていない。それでも、なんの支障なく日常をこなしている事実には、嗤わらいが出そうになるんだ。

物質に反射した光を眼は捉える。つまり、光によつて色は変わる訳で、暗いところなら暗く見える。当然、明るいとところなら、明るく。夕焼けには、朱く染まるように。

朝、おきまりの時間に家を出る。おなじ道を歩いて。2つ目の角を曲がると、女のコが先を歩いている。スカートのチェック模様。隣町の高校の柄。いつも

おなじ色のベストを羽織って、革靴を重そうに、引きずったように、少しだらしなく歩く。きつと、文化系の部活をしているのだろう、運動とは疎遠な白い脚^{ひかがみ}。臍^{たゆ}の奥までまっ白で、血の気がない。歩みと共に肉が盛りあがり、波うつように弛む、中で液体がうつろっているような感触を想起させる。本当にあの中に筋肉や骨が混じっているのだろうか。血管だって、握れば赤く浮きあがる筈だ。だけど、曇り空に隠れ、暈^{かさ}の掛かった萎えた太陽が照らしだすと、さらに不健康に思える程の乳白色で、よもや牛乳で充たされているのではないかと想う。それでなくとも、もし、あの大腿を切ってみたならば、中までおなじ、まっ白な色をしているように想えるんだ。

